



レッサーパンダの介添え哺育への試み

○中上志保、石橋佑一、有川 瞭、外平友佳理（到津の森公園）

到津の森公園では2014年、2015年にレッサーパンダが繁殖しているが、いずれも自然哺育に至っていない。原因として出産後の母親の体調不良（パンティング）や母乳不足が考えられる。

レッサーパンダでは母親による自然哺育が困難な場合、人工哺育での生育が主だったが、人への依存やかみつき行動などの問題もある。

自然哺育を目指し、寝室の改善や栄養剤の強化を行うが母乳不足及び母親の体調不良は改善されなかったため、2017年度の当該個体は『介添え哺育』を試みた。

注1：自然哺育が困難な場合、親に付けた状態で哺乳や一時的な保温をヒトの手で行い生育を助けることと定義した

個体情報



2017年 当該個体

経緯

日齢	1～3日齢	4日齢
同居時間	終日	11時半まで
行動記録	<ul style="list-style-type: none"> 出産直後から授乳行動や子へのグルーミングを行う <p>パンティングをしながら授乳をする母親</p>	<ul style="list-style-type: none"> 子の活力の低下と体重の減少 母親のパンティングが見られ長時間巣箱にとどまらず子の体温が33.1℃まで低下 <div style="border: 1px solid red; padding: 5px; text-align: center;"> <p>自然哺育の断念</p> <p>↓</p> <p>養育行動が見られたことから介添え哺育に移行</p> </div>

介添え哺育を行うにあたって

●母子の分離方法

巣箱のある寝室から母親をパドックに誘導し、カウンターを閉め、子と分離する。また、再導入の際は、分離と逆の手順で行う。同居中は、監視カメラでの間接的な観察を行った。

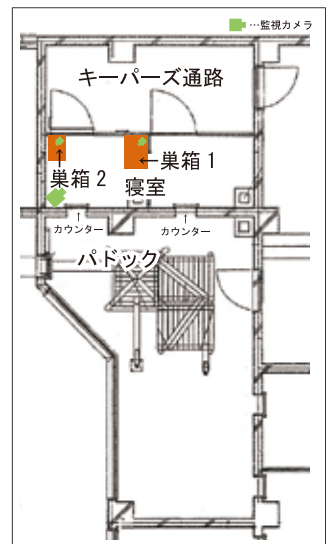
●同居時間の設定基準

子の体温及び活力状態から判断し、体温の低下は1.5℃程度までを許容範囲とした。母子の分離が困難な場合は、無理に引き離さず同居時間を延長した。

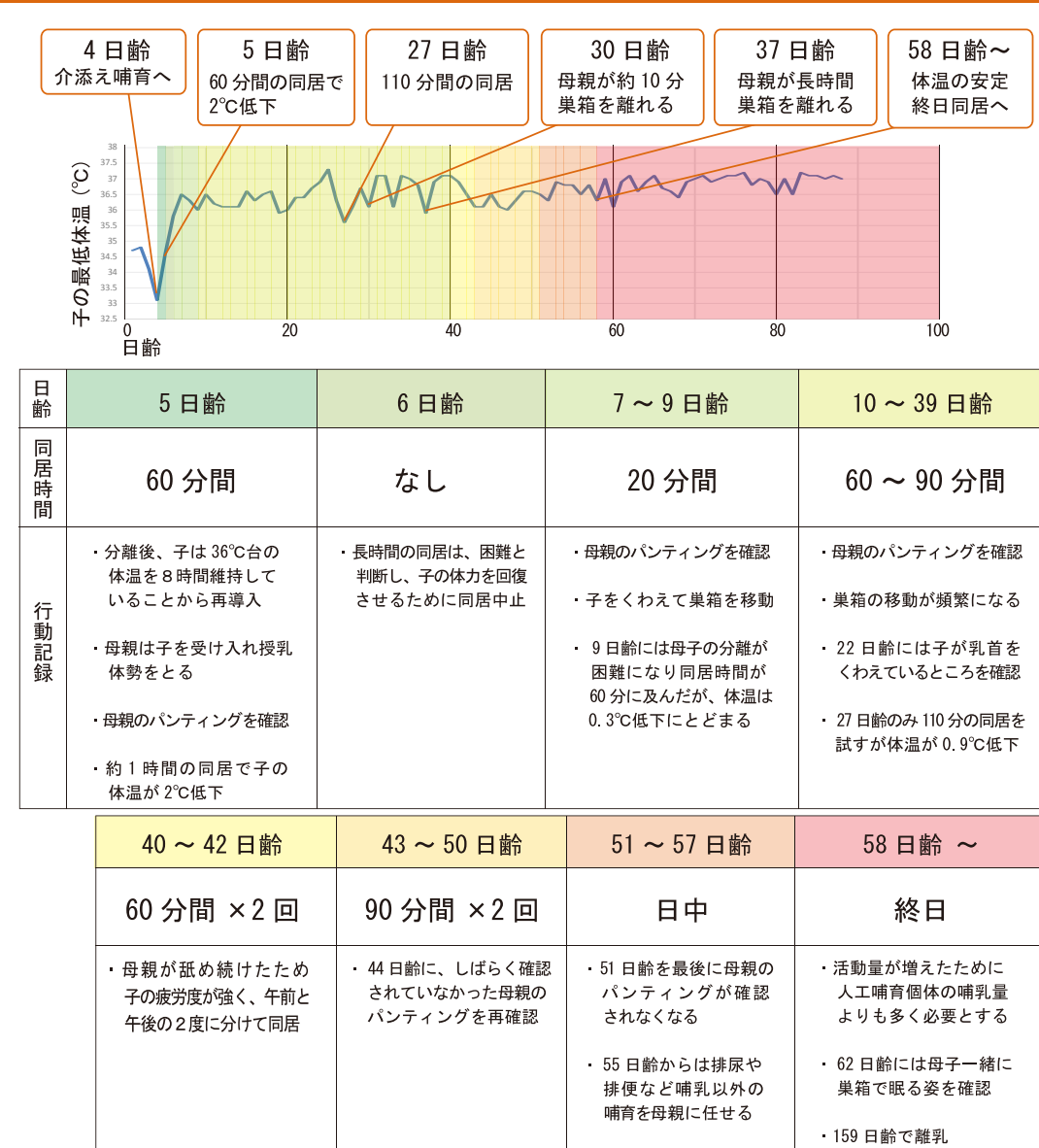
●注意点

- ・12日齢まで、子の体に母親の便を塗りつけて同居
- ・50日齢程度までは母親の前で子に触れない

獣舎図面



育成経過



介添え哺育が成功した要因

トレーニングによる

毎日の体重測定 ボディチェック 定期的な採血や超音波診断

結果

母親が飼育者の介入を許容
母親へストレスを与えずに子の状態のモニタリングが可能
⇒迅速な対応へ



超音波診断の様子



体重測定の様子

まとめ

- ・哺乳のみの介助では子の体温が維持できず生育が望めないことが示唆された
- ・母親との同居時間を段階的に延長し、子の保温を最優先とした介添え哺育を行うことで生育させることができた
- ・親子の完全な分離をしなかったことで、母子関係を維持することができた

今回のような母乳不足や母親の体調不良の場合でも、母親が飼育者への忌避行動を見せなければ、人工哺育ではなく介添え哺育で生育することが分かった。